

166
159

WESLEY'S CONVERSION

櫻井成明著

ウエズレーの師改信始末 全

東京メソヂスト出版舎

およんうゑすれい師改信始末

●引用参考書目

集(日記)

うゑすれい全傳

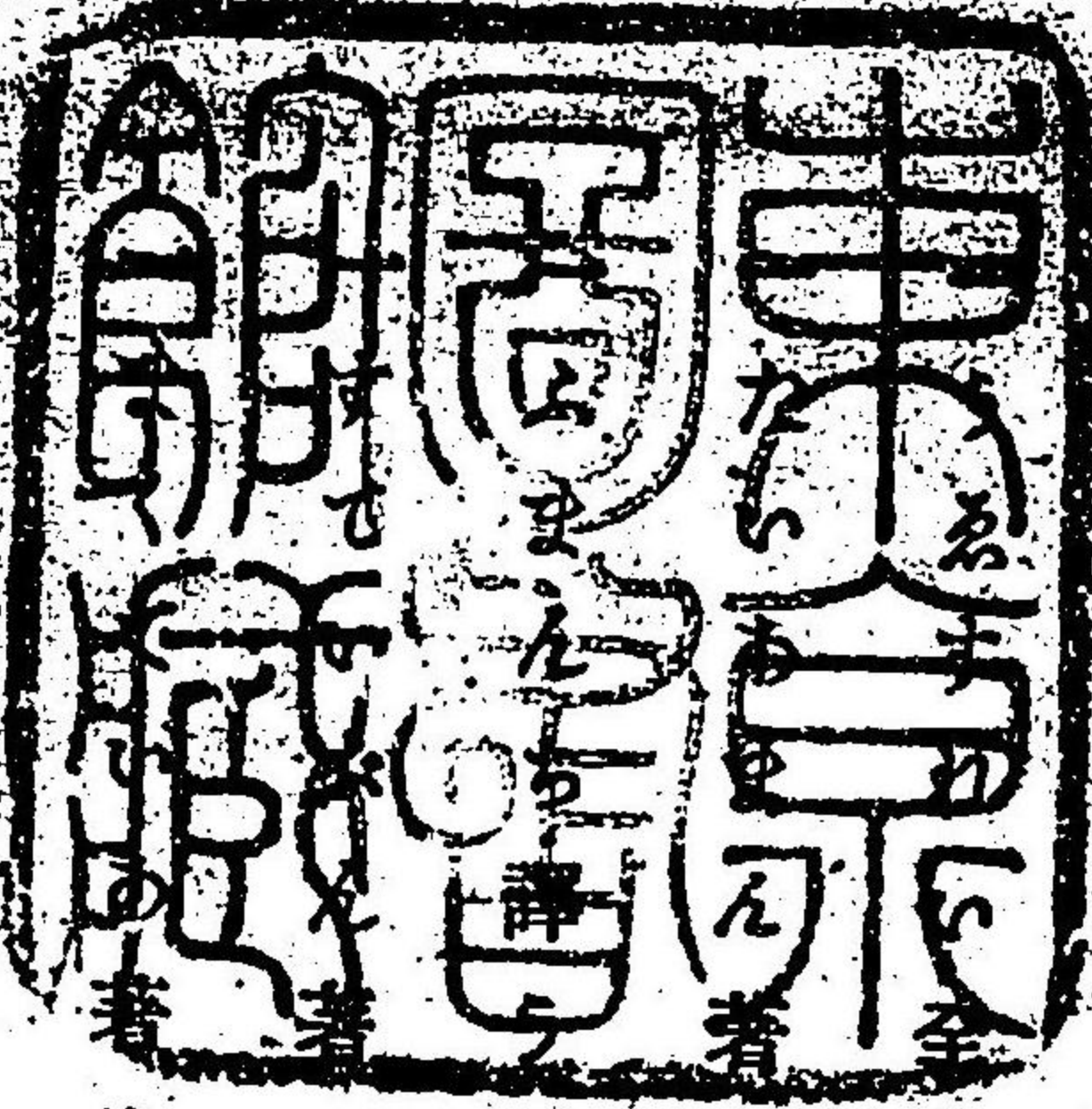
ゑすれい傳

めそぢすと教會史

めそぢすと教會史

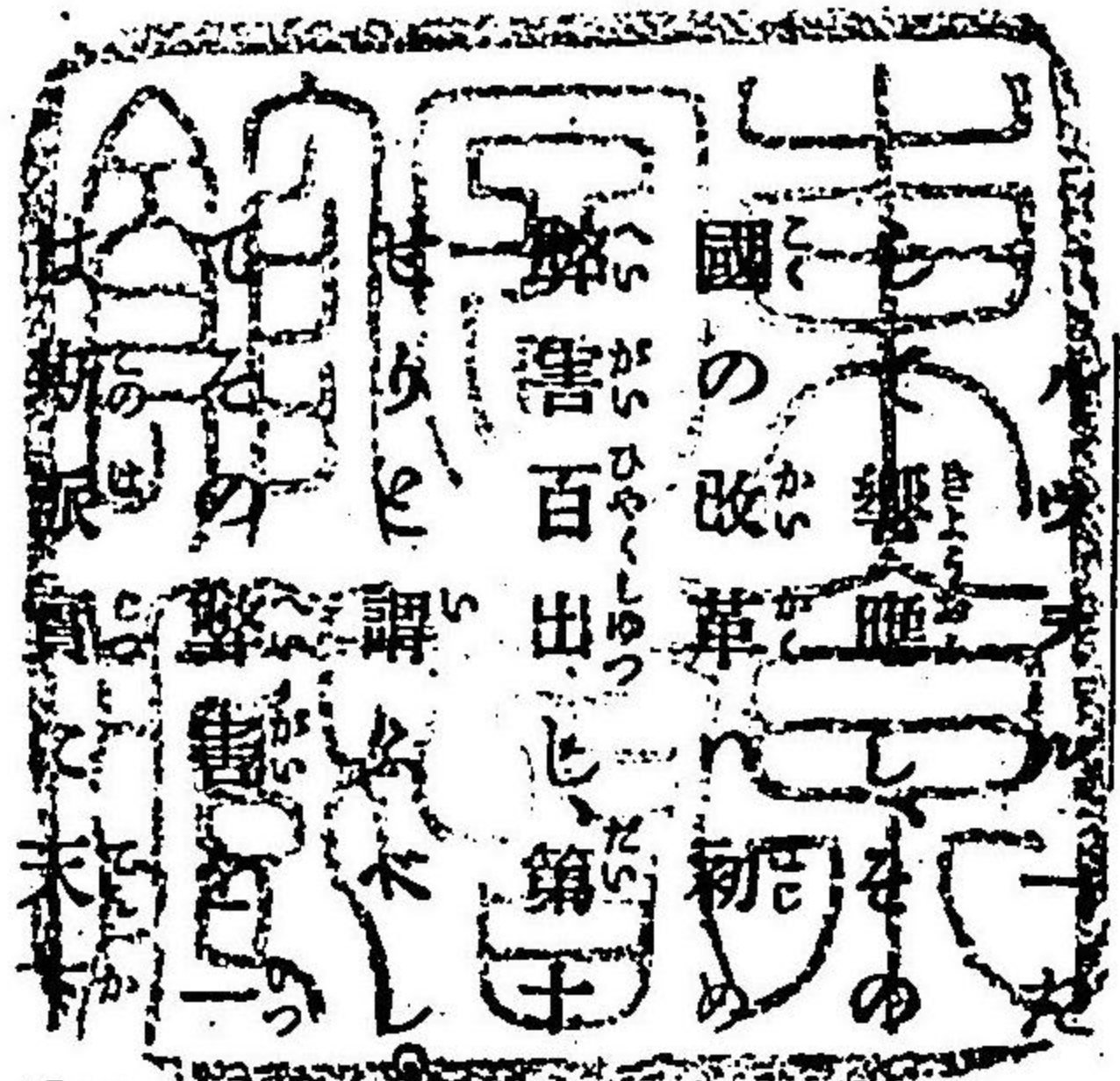
一だにえる著めそぢすと教會史

二かるつ著教會史



あよんうあすれい師改信始末

東京 櫻井成明 著



び宗教改革を德國に唱ふるや、天下喲然と
 化を蒙らざる者殆んどこれ無し。而して英
 政治の力を假りしと甚だ大なりしを以て
 八世紀の上半期に及びては殆ど其極に達
 是に於てメソヂスト派起り、巻席の勢を以
 掃し、敷て宇内萬國も及びし、今日に至りて
 宗教の一大勢力となりぬ。然り而してメソ
 ヂスト派をして英國を顔乱の極に濟ひ、今日
 の教勢を爲す
 に至らしめしものハ實にジョン、ウエスレイ師の信仰に因

あよんうあすれい師改信始末

れり。師の信仰をして斯の偉業を成し、盛名を竹帛に垂れしめたる所以の者はまた一にその改信の顯著あるに因らずんばあらず。その謂ゆる改信の始末頗る聴くべき者あり。夫れ天の偉人を起し、之に膏を灑ぎて道を載するの器と爲し、偉業を成さしめんとするや、必ず先づ彼をして内自ら備ふる所あらしむ。其心志を苦め、其筋骨を勞し、其體膚を飢し、其身を空乏にし、行ふ所その爲す所に拂乱し、その漸く心を動し、性を忍び、その能くせざる所を増益するに及んで、而して後ち始めて之を用ゆ。ウエスレイ師も亦その一人ありと爲す。

師の後年偉業を成す所以のもの幼よりして既又其宿因の存するあるを見る。師年甫めて六歳、一夜三女兄と共に寢

室に在り、而して弟チャアレス時に生れて厩に二月、傅母に抱かれて亦側に臥しぬ。夜正に半に參す。家會ま火を失す、煙焔室を突て入り、火片一女兄の足邊又落つ。女兄驚き起ちて傅母を呼ぶ、傅母急にチャアレスを抱き、三女兄及び師をしてれのが後に尾して出しむ、而して師は熟睡して知らず、獨り室に遺さる。時に火勢頗る猛烈なり、父母亦漸にして窓を越ねて庭園に下り、兒女を數ふる又一人を飲く、驚きて檢すれば則ち師在らず。會ま叫聲煙焔の中より聞ゆ、父即ち往かんとするに階段既に焼け落ちて登るとを得ず、乃ち跨きて祈り、其兒が靈を天に委ね、喪然として人色なし。師は人の來るを待てども久ふして來らず、傍を見るも箱あり、即ち其箱に登り、寢室の窓に立ち、救を呼ぶ。事急よして

楷を建つるの違ふく、一人の男壁に倚りて立てバまた一人
 その肩に攀ぢのぼり、双手を高く舉げて師を抱き、纒に救出
 すを得るや否や、寢室は格澤の響と共に紅炎の包む所とな
 りぬ。父母は天に歡び地に喜び、父人を呼びていふ「請ふ我儕
 をして跪き、神に感謝せしめよ、神は今我に八子を悉く與へ
 玉ひぬ、家と財とは失せあば失せよ、兒子にして全からば我
 は富める者なり」と。父サミウエルは遂に師の八歳なりし時
 師をして神の傳道者たらしむるは正お我が務なりと信じ、
 母も亦後に及びて、此時より神がかく大なるめぐみをもて
 護り玉ひし兒に特別なる注意をもて教へはこくむべき決
 心を爲したりしといひぬ。

師の母は世の謂ゆるスザンナ、ウエスレーあり、克く子女

家庭の教育を爲せるを以て聞ゆ。その敬虔にして規律正し
 き家庭に於て師は又一層の注意を以て教育せられぬ。師は
 母よりして常に神がおのれを九死のうちより救出し玉ひ
 し洪恵をいひきかせられたれば幼必にも深く感ずる所あ
 り、世の兒童等が遊び戯れに餘念なき頃より敬虔の心厚く、
 嚴正にして一舉手一投足必ず内に省みて心に疚しからざ
 らんとを務め、己に克ち、情に忍び、岐巍群に越ゆ。八九才の頃
 痘瘡を病み、頗る篤し、時お父はロンドンに在り、その癒ゆる
 や母は父に書を送りていば「シャツクは猛くも病に耐へ
 て候、恰も成人の如く實にキリストアンの如くに、少しも悶
 へかこつとは爲し侍らざりき」と。

十一歳にしてロンドンなるチャアタアハウス學校に入

り進んでオクスフォールド大學に入る。當時大學の氣風大に頼れ、不信説盛行はれて、諸生奇邪淫注れ行多し。然れども師は幼時家庭の素訓深く心に刻みて磨せず、學業の傍には深く聖書を味ひ、トマス、ケンピの基督操論、シエレミ、テロルの著書を反覆して精神の修養を怠らず。されば敬虔の徳は一變を風靡して、二十三歳にして按手禮を領けて執事職に就き、該博の識は諸先輩を驚かして、二十五歳にして文學博士の榮位を領するに至りぬ。

師の父サミウエル、ウエスレーはエプウオールの總牧師たり、年漸く邁みて劇職に任へず、師を呼び補助傳道師と爲す。時に師の弟チャアレス、オクスフォールド大學に入り、亦德行の青年にして深く諸生の敗行を慨し、同志と相結んで一

社を設け、宗教及び文學を研究し各徳を建てんとす。諸生集りて之を誹謗し、其社を呼んでホウリイクラブ(聖俱樂部)といひ、社中の者を嘲てメソヂスト(几帳面者)と稱す。オクスフォールドのリンコオン、カレツツは師が嚮きに擧げられて其會員たる所なり、カレツツの校長師を請ふてその教授たらしめんとす。師意頗る動き、遂に一千七百廿九年十一月師のエプウオールスを辞して復オクスフォールドに還り、その職に就く。チャアレス等師來ると聞きて大あよろこび迎て其社を擧げて師の指揮を求む。師乃ち其牛耳を執り、堅く約束を設け、一週に二日斷食を爲して深く自ら省み、一回主の晩餐を領けて救主の恩を拜す。

既にして社漸く進み、ホイットフィールドも亦その一人と

なれり。その社の漸く盛んなると共に迫害譏謗もまた漸く加はり、大學の教授先生は其運動の異常なるを非難し、有司等は謂ゆるホウリイ倶楽部の會合を禁止せんとするに至れり。社中大に驚き、果は恐怖を抱きて一人脱げ、二人散りて厩に五人を留むるに至りぬ。然れども師は益す勇を鼓し、誹謗百出嘲弄万端なる中に立ちて弟チャアレスと共に奮勉事を執り、いたく用を節して社費に宛て、貧困を賑はし、往くも車を用ゐず、徒歩にして數百里を走り、拮据鞅掌殆ど眠食を廢するまでに至りしかば師が康健なる躰軀も之に任へずして、遂に病を獲るに至る。病漸く劇く、血を吐く屢ばなり。一夜床より起ち、その終焉の方に來りと思惟して吐血壺を碎き、神を頼んでいふ、「主よ願くは爾の來り玉はん爲めに

我を備へしめよ、而して後ち爾の欲し玉ふ時來り玉へ」と。神は未だ師を棄てず、さしも危かりし病も全く癒へて元に還りぬ。師は益す奮ひ、深く日暮れ途遠きの感を爲し、又阻勉まて事に當れり。

師幼おして奇禍を免れ、深く其天意なるを識り、長じて堅く神の爲めに盡す所あらんと欲す。内は賢母の庭訓を受け、徳の樹つや深く、外は大學の榮位を領して造詣且つ廣し。入つてはオクスフォールド一校の領袖となりて以て先進を後に瞻若たらしめ、出てはメソヂスト一社の牛耳を執りて以て俊髦を誘掖し、その道を守るや譏謗骨を刺すなかに在りて少しも動かす、その事に當るや拮据鞅掌して遂に病を得。然れども神は未だ擧げて大に用ゐる玉はず、何となれば師

の裏猶未だし者あり、蓋し其信仰いまだ樹たず、其悔改いまだ全からざるなり。抑も師は心未だ明に救贖の光明を見ず、只管に信仰の工を以て極に達せんと苦心し、聖靈の革新を忘れて、聖たり、謙たり、虔たらんとして焦慮す。心は常に希望と畏怖と相混じていづこに礎を下すべきやを知らず、師は實に未だ安心立命の域に達せざりしあり。而して今や師が一生過渡の一大時期は近く師の頭に臨めり。

一千七百三十五年四月師の父サミウエル死す。是より先き三年英國は新に北米なる今のジョルジアに殖民したりしが、進歩頗る著るきを以て其會社は益す望を屬し、更に基督教を以て殖民及び土人を教化せんと欲し、敬虔にして熱

心ある壯年の役者を求む、而してウエスレー師等一社の人を聘して之に當らしめんとす。師時に父を喪ひ悲悼の涙のまだ乾かず、且つ一家の責任悉く師に歸し、劇に寡とありし母スザンナの慰源も亦師に存するを以て、一旦之を辭したれども此度新に殖民を將て赴かんとする所の人の將軍オグレスルプとて、父サミウエルの友にして師を強請して、已まざりければ、師も遂に心を決し、母スザンナが許可を得、家事を擧げて之を兄サミウエルに托し、是年十月十四日弟チャアレス及びベンヂヤミン、インガム、チャアレス、デラモツト三人を率ゐ、將軍オグレスルプと共にロンドンを後にしてグレエブセンドに赴き、こゝよりジョルジアの航路に上りぬ。其發するの前四日師書を人お贈りていはく「此行に

つきて予が本心の在る所は予自身の靈魂を救はむとの希望なり、道を異邦人に傳へ、以て基督の福音の眞味を學ばんと欲す」と。師は時に年三十二ありき。

船中よりは百二十四人の殖民あり、うちに二十六人のモラビアンありて、其派の監督ダビド、ニツツマンなるもの之を率ゆ。こゝにモラビアン派の起源を尋ぬるに、德國聯邦の一州あり、シヨン、ホスが其隣邦ボヘミアに起りて、宗教改革の曉星とあるや、モラビア人は他に先んじて其説を奉じ、羅馬教會の奢侈と僧侶の非行を惡み、専ら實際の信仰によりて端嚴ある云爲を守り、ルウチルの新教を建つるに及びて直ちに之に加はれり。其のちボヘミアに三十年の戦争あるや、ボヘミアはもとよりモラビアの信徒等は言ふべからざる災厄と迫害とを蒙りつひには其國にもゐたよ

まれずして、ボウランドまたプルシアに遣れ、以てその信仰と生命とを護りぬ。而してその故國に残りをる所の者は絶えず、壓虐を受け、年所を経ると共に子孫は其父祖の堅信を守る能はず、私に新教を奉じて神に事へ、公には羅馬舊教會に屬して一旦の急を極ひたりしも、漸くにして福音の光は其子孫の家より消ゆるも、父祖の有じたりし信仰も、その建てたりし教會も今はたゞ夜閑爐邊の閑話に屬してそれさへも次第に忘らるゝに至らんとす。時にモラビアに一工匠あり、クリスチアン、ダビドといふ、初めの羅馬教徒たりしが一旦その非を知りて新教に入り、福音の宣傳に熱中して國內を周行し、信仰の復興を圖りしむ、十八世紀の初めに當り

國人大に覺醒し、將に滅びんとしたりし舊時の信仰を再燃してければ、羅馬教徒は大に驚き、實を懸けてダビドの首をもとめ、ダビドを宿泊したる家は容赦なく之を壞ち破りて追害を極めしかば、ダビドは遂に其徒を率ゐてサキツニイ州に遁れり時に一千七百二十二年あり。

サキツニイにツンゼンドルフ侯なるものあり、幼より敬神の心篤く、基督を愛すると衷よ熱し、人を思ふと己の如く、其周親普徧の精神は當時の敬神教徒が比黨偏狹あると大に其撰を異にし、歐洲諸國を周遊して到る所の名流と交るに及びて、益す發明する所多く、二年のち故國に歸り、少らく仕途に就きたりしが、會々モラビアン遁逃者の來りてその庇を求むるあり、即ち其城外の地を與へ、つらく彼等が

精神行動を視て大におのれの懷抱する所の旨義と投合せるをよろこび、遂に身を投じて彼等の保護と其教理の廣宣とに勉むるに至れり。

クリスタファン、ダビドは其徒と共にツンゼンドルフ侯の庇により其城外の地に居住を許るされしかば、乃ち日を擇んで「あんぢの家に住むもの」の福あり、かゝる人は常に汝をたよへまつらん、詩篇第八十四の四節を誦して初學を樹に加へ、研つて材とあし、以て家を建つ。かくてヘルンハツト村の起り、遁逃のモラビアンは頻年來り集り、その他各宗派の人々風を聞き、走りて就くもの甚だ多く、忽ちにして三万の徒を得るに至り、遂にモラビアン派の中心となれり。是に於てツンゼンドルフ侯も職を辭して専ら傳道と後進の薫

陶とに従事し、つひよ一千七百二十七年更に約束を定めて、新モラビアン教會を建てぬ。

此教會は教義よりも質實なる友愛を重んじ、其信仰のウテルの規約に遵ひて更に他の信仰個條を設けず、單純の信仰を以て神に事へ、基督に交り、和樂の精神を以て人を愛し、世に處し、殊も外國傳道に銳意熱心して、北方寒冷肌膚を腐らすの地にも、南界炎熱金石を鑠すの域も、其文明なるにも、其未開なるにも、凡そ足跡の至る所、舟車の通ふ所、世界を一大教區として、斯教斯愛の福音を流布するに力を盡せり。

さて此度モラビアン殖民を率ひてジョルジアも赴かんとする監督ダビド、ニッツマンはモラビアも生れ今年六十

歳ある最も敬虔の教師なり。千七百二十年著るしき宗教の興復此監督の住へりし都に行はれし時、ジョエイト派大に之を妨害し、一日ニッツマンの家に集會ありし時、巡查來りてニッツマン等二十人を捕へて獄に下したり。ニッツマンは三日の間食を與へられず、嚴しく鎖に繋がれ、呵責烈しかりければ、鼻口より出血夥しく、毛孔悉く紅を滴らし、慘狀目もあてられず。ニッツマン遂に堪へず、竊に脱がれて、其友の家に匿れ、纒に其害を免れたり。今は斯派の監督となり、徒を率ゐてジョルジアある同胞の集會に臨まんとて、ウエスレー師等一行と俱にせり。

此頃の航海は頗る不便にして、十月の十四日に各乗組を爲せしものから十二月十日までは處々に船おどりして直

航を爲すとを得ざりき。先づ初めにヌウンス(愛爾蘭の郡)にて暴風に逢ひ、コウズ港(英國)に着して、こゝより護衛の爲め遣はさるべき兵士を待ち合しぬ。

ウエスレイ師等は此永き航海中一の規約を設けぬ。毎朝四時前床を離れ、五時まで各自私に祈る所あり、五時より七時までは相集りて聖書を読み、古代の載籍を参照して沈潜反覆す。七時に朝食を喫し、八時に諸人を集めて公議を爲し、其日の課を説明す。九時より十二時までは師は概ね獨逸語を學び、アラモットは希臘語及び航海術を研究し、チヤアレス、ウエスレイは説教の案を草し、インガムの小兒を集めて之に教ふ。十二時に再び相集り、相互に祈り且爲せし工につきて報す。午後一時の頃午餐を食ふ、これより四時迄は殖民

の爲め書を読み道を語る。四時に及て夕の祈禱を捧げ、或は日課を説明し、或は公衆の前にてその兒女を教理問答を授け、若しくは書を教へ、五時より六時まで再び各自私に祈禱を爲し、六時より七時まで各その船室に退きて英人の殖民三隊その數合せて八十人ありしものゝ爲めに書を読む。七時には師はモラピアンと共にその公の禮拜に臨み、インガムは甲板上にて有志の者に書を読みぬ。八時に四人相集り、他人を容れずして、相勸む、而して九時より十時の間に床に就く。

十一月三日師等四人は相携へてワイト嶋とて英國海峡中の一小嶋に上り散策してありしが、互にいひ合せ、左の盟約を爲し、おそそかに署名したり。

我儕茲に神の聖名を以て盟約を爲す、アーマン。我儕は異邦人に神の業を爲して功あらしめんには我儕四人全く心を協せ力を戮すに非ざれば能はず、また此の心を協せ力を戮すには、各其一個の意見を棄て、多数の議に従ふに非ざれば能はざるを深く心に信する所ありて、神の佑助を仰ぎ、以て下の條々に同意する者あり。第一、我儕のうち緊要の事を爲さんとするに當り、先づ初めに之を他の三人に陳告するとなくして着手せざるべし。第二、一事につき我儕の判断相異なる時は何人も一人の私意を棄て、他に従ふべし。第三、四人説互に異なる所あき時は先づ神の指導を願ひ、而して後ち圖を以て事を決すべし。

ジョーン、ウエスレイ

チャアレス、ウエスレイ

ベンジャミン、インガム

チャアレス、デラモッド

コウズよりヨオル、ヨヤのサバンナ河までの航海に、五十七日を費せり。此長き航海中風浪の危難勝げて數ふべからず。明くれば一千七百三十六年一月の十七日風にはかに暴を出し、逆折したる大浪崗山の崩れたらんが如くに船に蔽ひかぶさり、船は艦端より舳尾にかけ動搖して更静まらず。頭桅の桁倒れ甲板上に墜ち、激浪船室の窓扉を打ちて内なる人皆濡ふ。越えて六日山の如き大濤船に當りて碎けをりから居合せしウエスレイ師は頭上より潮を浴びて皮

膚にまで徹したり。二日経ての夕風濤また大に起りぬ、陰風
 蓬々として怒號し、濤吠の海立ち、洶々として大軍の吶喊し
 て迫り来るが如く、空の電霆頻り又閃き、霧立ち煙升りて恰
 も火を失したる荒原に似たり。されば船は簸颺掀翻して天
 に翔り地に潜み、人々迷眩困倒して哭泣の聲四に起り、大お
 る帆は寸々に裂け、水夫の一人遂に飛んで海に入る。此時彼
 のモラビアン派の人々は恰も夕の禮拜を爲さんとして曠美
 の詩篇を歌ひのりあり、ウエスレイ師も亦常の如く之に加
 はりをりぬ。師は詩篇を手には援るものから風濤のかゝる
 光景に目も暮れ心も消えて、讚美の聲などは仲々口に上ら
 ず、今にも死の我に襲ひ來らんかと怖れ惑ひてゐたりけり。
 モラビアシの人々は他の周章狼狽にも目を呉さず、従容と

して謳歌を停めず、神を讚し主に禱りて、更にわが周圍に何
 ものゝ在るかも知らざる者の如し。ウエスレイ師は彼等を
 凝視し、身に省みて心切りに慙愧しつ、禮拜の畢るを待ちて
 その一人に問ひけるは「御身は此風濤に恐れ玉はぬか」。その
 人對へて「敢て怖れず」といふ。師重ねて「然らば御身等の女子
 たち子供衆は如何に」と問へばかのモラビアン「否とよ我儕
 が女子また子供は死するを恐れ申さずと答ふ。師は之を
 聞き一言もあぐ頭を垂れ腕を拱き、恐懼してわあささる
 英國人のなかへ往き、今のモラビアンが仔細を語り、神を畏
 るゝものど畏れざるものとの間の相違霄壤も管ならぬと
 を告げしらせ、その日誌に書して「此日は予が未だ嘗て觀さ
 りし所の最も光榮なる日なり」といひぬ。かくて長き船路も

遂に果て、二月五日船は恙なくサバナに碇を下しぬ。
 明くれば六日午前八時のころウエスレイ師等は始めて
 アメリカの地に歩を入れぬ。オグレンルプは師を導きて小
 高き丘に登れり、茲に師等一行は肅み跪きて神に感謝を捧
 げたり。オグレンルプは短艇してサバナに赴き、師の其徒
 と共に別に小集を開き、聖書を讀み祈禱を爲す、讀みし所の
 聖書は馬可傳第六章おして殊に師が場合又適合してハブ
 テスマのヨハチの勇氣と受難とに勵され、救主の初めの福
 音説教者よ示めし玉ひし命令、及び彼等が海中よての困憊、
 主を變化と誤りて周章したる時、「心安かれ我なり懼るゝと
 勿れ」と宣ひし主の語により慰められ、師等は前途の希望頗
 るかがやき、精神甚だ旺なり。

翌七日オグレンルプはサバングンベルグと連立ちサバ
 ンナより還り來る。サバングンベルグは名をオウゴスト、ゴ
 ッドリーベと呼び德國に産れ、當時モラビアン派の長老お
 して、學徳頗る高く、諸人の歸依淺からず。ウエスレイ師は一
 たびサバングンベルグお會ふや、其徳容のゆかにも高きを
 視、正しく我を教ふる人なりと思惟して、懇懇に我來意を語り、
 將に執らんとせざる事業につきてその助言を乞ひぬ。サバ
 ングンベルグ徐ろに對へて曰く「我兄弟よ、われ先づ御身に二
 つの事を問ひ參らすべし。御身は衷に證明を有ち玉ふや。
 神の靈は御身の魂と共に御身は神の子たるを証明いた
 せしや。師はかく問はれて大に驚き答ふべき所を知らず。件
 の長老いしばし師を打守りゐて更に「御身は耶穌基督を識

り玉ふや」と問ふ。師益す其意外なるお驚き、少らくためらひしが、「われ彼は世の救主あるとを識れり」と答ふ。曰く、「實お然り、されど御身は基督の御身を救ひしとを知り玉ふや。」師は是に於て大に惑ふ、曰く、「われ望むらくは彼お我を救はん爲めに失せ玉ひしあらんを。」長老おしかへして、「それを御身は確よ識りておはするや」と問へば師「われ識りぬ」と答ふ。然れども師は自ら是等のこたへ大に己を欺けるを知りて心よ忤怩たり。スパンゲンベルグ長老は師の未だ全く悔改に至らず、眞の信仰を有せざるを視て去りぬ。

ウエスレイ師はスパンゲンベルグ長老に値ふて頗る心に打たるゝ所あり、後また長老を訪ひ謙りて教を請ふ。長老乃ちその越方および將來の趨向を語る。師は益す感じ、己に

省みて明かに我衷に頗る歎る所あるを認め、いよ／＼モラピアンの信仰に畏服せり。此時インガムとチャアレスは傳道の爲めフレデレカに赴きしかば師は遂にデラモットと共にモラピアンの人々と居を同ふす。師は日々彼等と起居を共にし、親しく其行動を視、その日記に志していはく、我儕は今や日々彼等と共に居りて、彼等が日常の言笑坐作を注視するの好機を得たり。我儕は朝より夕に至るまで彼等と一室に在りて、我が遊歩運動の爲めに費す些少の時を除きては須臾も彼等を離れしとなし。彼等は常に事を執れり、常お樂しげに暮し、互に好誼を爲して喜べり、彼等は疾言遽色せず、争鬪憤怒を遠ざけ、残忍を離れ、喧嘈悪言を爲さず、彼等が召されて定りし職業に怠るとな

く、凡て爲す所の事毎に一舉手にも一投足にも我主の福音を飾れり。

去程にスパンゲンベルグは將にペンシルバニアに往き監督ニツツマンは德國に歸らんとして彼等が教會の將來執るべき運動につきて協議し、のち新監督撰舉就職の事あり、ウエスレー師も亦之に臨みぬ。其式の單純にして嚴肅なると師をして遙々たる千七百年間のすべての事を忘れてその昔に立ちかへり、身は幕造のパウロ漁父のペテロが首席を占めて、繁褥の儀例なき、唯聖靈と權力の証明とのみ充てる一の集會に與りし如きの感あらしめたり。

ウエスレー師は外に此の如き篤信のモラビアンと交りて感化を受くると頗る深く、内は己よ克ち省察存養して道に勵むと太だ篤し。且世界の各地より移住し來る人々に福音を語らんが爲めに德國の語を初めとして佛語、伊太利語を使用し、遂に猶太人に道を傳へんが爲めに西班牙語を學ぶに至れり。

師はオクスフォールドに在りし時の如く少數なる敬虔の心を有せる人々を集めて一社を設け、一週に一二回集會して各おのれに省み、互に相教へ相勵し、感化を社中に及ぼしたると少しとせず。是に於て師の名聲漸く揚りて移住民等争つて師が講壇に集りて其説を聴き、傳道の効果日著るし。

師始めて説教を爲して二週のうち弟チャアレスに書を送りていふ、われ道を此地に傳へて未だ一の障礙に遭はず、

凡て塗坦に事順ひ、來果を約す。多くの人民は今や睡眠より
 覺めんとする者の如く皆尊敬すへく賞讃すべき所の者な
 り。今日に於てハわれ未だ一の暗雲の我の上に横はるを見
 ず。然れども此晴朗ある天氣も永くは繼かざるべく、風雷烈
 雨も亦早晚來るべきを信ず。風雷や烈雨や來らんとならば
 來れかし、我儕備へて之を待つべし。實に天變は測りがた
 し。師の名聲も永くは保つと能ざりき。師が宗教上の規約極
 めて極端に走りて嚴に失したりしより、衆心漸く師を厭ふ
 に至りぬ。師の教會古代の慣例を回復するに銳意あり。洗禮
 は必らず浸漬すべきを主張し、監督の按手を傾けざる教師
 の授けし洗禮を無効と爲し、其極は誠に敬虔篤信ありし人
 を只その洗禮無効の故を以て主の晩餐より擯け、病める小

兒を其父母の請あるも拘らず之に洗禮を授くるに浸漬
 して願みざるにまで至れり。
 移住民等漸く心を離し、敵意を含む者さへ出で來て、師の
 名聲昔日の如くならざりしに端亦くも一大事件生じ、師を
 じて萬計盡き果て身を脱して英國に歸らざるを得ざるに
 至らしめぬ。事の元を尋ぬるに師がオオムアに上陸して
 傳道に着手するや、一少年婦人來り師に就きて救拯の道を
 問ふ。婦人名をソフピア、ホプキイといひ、性温良にして容貌
 も端正に坐作また禮は嫺へり。ソフピア一たび師に逢ふて
 より意頓る動き、問われば則ち來り、隙あれば則ち訪ひ、常
 師に従ひて遊ぶ。師會を熱を患ひ、褥に伏するもの一週余日、
 其間ソフピアは日夜師につき添ひて看護に力を盡し、

モツドが師の爲めに湯薬の務めに當らんとする時には自ら起ちて事を執り、容易にデラモツドをして事を爲さしめず。ソフヒアまたオグレンソルプに問ふて、師ハ婦人の如何なる服装を好めるかを知り、爾后常に白衣を着く。師もソフヒアの心を悪からぬとに思ひて病愈るのち愈よ篤くソフヒアを視ればソフヒアも亦喜んで之に事へ、かくて二人の交情は日に月益す深く、一時師とソフヒアとの關係は衆人の談柄たるに至りぬ。師遂に婚をソフヒアに求む、ソフヒアは固より師を慕ふといへども師が精神の修練を爲さんが爲めの苦行甚しく、且つ屢ば断食を爲すを視て、おのれ其伴侶たるの難さを知り、未だ容易く應諾を與へず。ソフヒアの嫉める人の夫をカウストンといふ、早くより此シオルジ

アに移住せしむ元匪行を以て英國お身を措きかねて此處に來りし程の者なれば狡猾不遜にして衆人の共に齒するを恥とせし者あり。こゝに又ウエスレー師より少しくおくれて移住したるウヰリアムソンとて、亦不良の者あり、初めよりソフヒアに念を運び深くカウストンに取り入りて其歡心を得、また婚をソフヒアに求めたり。ソフヒア是に於て意動き、遂にウヰリアムソンに嫁む。之を千七百三十七年二月十二日の事と爲す。師望きを失ひしと限りなかりしと雖も猶我が教區の一人士としてソフヒアを待てり。師ソフヒアが行動前日に違ひ大よ教會の規約に戻る者あるを見て、七月三日其理由を列擧しソフヒアが教會の聖式に與るとを拒む。ソフヒア大に

之を憤り、其夫又訴ふ。越えて三日カウストン捕吏及び記録吏と共に來り其理由を問ふ。師對ふるに牧師の職權を以て之を爲したると、其職權執行あつきては敢て人を偏視せざるを以てす。かくて數週は事なく過ぎぬ。八月の七日安息日に主の晚餐式を擧ぐ、而して師はソフピアの之に與るを許さず。ソフピア怒ると益す甚し。翌日記録吏はウエスレイ師に拘引狀を發し、警官をして師を拘引してサバンナの廳に出頭し、ソフピア侮辱の廉を以て訴へたるウヰリアムソンと對決せしむ。ウヰリアムソンは其妻の名譽回復損害要償として一千磅の請求を爲したり。

ウエスレイ師は拘引せらるゝて捕吏バアカア記録吏クリスチイの廳に出づ。師毅然として對へけらく、「主の晚餐を授け、若しくは之を拒むは全く宗教上の事にして、公等の關する所に非らず、われは公等が此事あつきてわが爲す所を製肘するの權を認ると能はざるなり」と。バアカア告ぐるに師の次回のサバンナ法廷又出で、陳辨すべきを以てして此日の廳は止みぬ。

ウヰリアムソン、カウストン等は如何にもしてウエスレイ師を構陷せんものと竊に奔走する所あり。其月二十三日遂にサバンナ法廷は開けぬ。而して其陪審官たるもの凡て四十四人、其一人は佛人にして毫も英語を解せず、羅馬教信者一人、公然たる不信者一人、浸禮教徒三人、而して背教者十六七人、其他は悉く平生師と快からざる所の者にして、此際師に復讐を爲すべしと誓ひたるものどもありしといふ。

カウストンは長く且つ熱心ある告訴を陪審官に述べッ
 フヒアの訴状朗讀せらる。後、カウストンはウエスレイ師は
 擅に國教會の主義規律を曲げ、此殖民地の幸福と繁榮とに
 適せざる教會規律を造れりとして凡る其目十二條を記載し
 たる書一通を陪審官に出せり。

數日ののち陪審官の多數決を以て告罪状を作る、記する
 所十條誣罔少からず。明くれば九月二日法廷再び開かれ、告
 罪状を人民に讀みさかざる。ウエスレイ師起て陳す、「我に對
 する告罪状十條のうち九條は事宗教内のものにして此法
 廷の關する所の者とは我が認むる能はざる所なり。唯ウ
 リアムソンの妻に對して我が書状を送り又談話をせしど
 いふ一事は固より宗教以外の事なるを以て我は謹で審判

を受け陳辯を爲すべし」と。サバンナの法廷の實お其權を有
 せず、唯師自らいへるが如くウ井リアムソンの妻に對する
 と、及び其夫の要求したる損害要償一千磅の件のみに於て
 その權を有するのみ。是お於て師は此件につきて論ずる所
 あらんとす。然るも法廷は之を拒み次回まで之を待たしむ。
 ウエスレイ師はジョルシアの傳道既に意の如くならざる
 を見て英國に歸らんと欲しければ、此時より十一月の終に
 至るまでソフヒア、ウ井リアムソンの訴件に審判を受け、之
 を了せんものと七回以上も法廷に出でしと雖も終にうの
 効なし。蓋しウ井リアムソン夫妻は師を傷げたるのち英國
 に歸らんと欲したるが故に殊更も法廷に不參して事の落
 著を遅からしめしなり。或はいふ、是れカウストンの毒計に

して、師をして煩悶に堪へず、殖民地より去らしめんが爲りなりしと。

十一月廿七日師ハ一の説教をあせり、人或は是れ師の告別説教あらざるかと疑ふ。此報一たび傳はるやウヰリアムソンはおのれはウヰスレイ師に對して要償一千磅の訴訟を爲し置けり、若し師を扶けて殖民地を去らしむる者あらば其人に此要償を請求すべしとの廣告を爲しぬ。又官吏等も師に令狀を發して此事件の落着するまでは決して此地を離るべからざるを以てす。師ハ之に答ふるよおのれは七回までも法廷に出で之に應へんとせしに、法廷の故に之を許るさざりしとを以てし、之に應せず。是に於て官吏の券書を發し、師が法廷より召喚ある時は必ず出頭すべく、若し

出頭せざれば五十磅の科料を出すべきとに記名すべしと命じ、又ウヰリアムソンは師の必ず其要償に應すべき保釋を爲すべしと促りぬ。師兩なむら拒みて應せず。其日午後長官等は令を發し、屬吏及び番兵等をして師の万一境を出るを見なば之を拒み、且つ禁するに何人も師を助けてウヰルツヤを去らしむべからざるを以てせり。時又十二月三日なり。今やウヰオルツアは師に取りて一の牢獄とあり、師ハその囚人たり。その夕師は公開祈禱を畢へ、竊に四人の友に扶けられて短艇に乗じ、こゝより二十里はを隔たれるプリンスボルグに遁る。途中幾多の患難を経て十三日チャアレヌメウに達し、二十二日此地を發し、英國歸航の乗船を爲しぬ。

懃愛の失望一事すら師が偽りなき清き心には容易に
 へざる傷痕なるに、かてゝ加へて倭者の毒舌にかゝり志せ
 し業も未だ成らざるにその地にも身を置きかねて、失敗と
 失望とを載せて故山に走る航行は、ゆかに師にはつらかり
 しとならむ。彼の件の起りし當時師は身に反觀して絶えて
 疾しき所あらざりければ神の聖語忍びて試勝を受くるも
 のは福なり蓋試勝を経て善とせらるゝ時は生命の冕を受
 くべければなりこの冕は主おのれを愛するものゝ約束し
 玉ひし所のものなりを憶ひ起して、獨り自ら慰めしも、今纒
 に身を以て逃れ、うしろめたき歸航を爲すに及んで百感蟻
 集して自責甚だ深く其日誌千七百三十八年一月二十四日
 の條お記していはく

われ士人を改信せしめんが爲め、亞米利加に往きぬ、
 然れども、嗚呼、われを改信せしむるものは誰ぞや、抑もこ
 の不信の邪念よりわれを濟はんものは誰なりや、何なり
 や。わが有する所の宗教の平時の宗教なり。危害來らず、艱
 難迫らざるの時にいわれ能く言ひ、且つわれ自らを信せ
 り、然れども一朝死その威を以て予に臨んか、予が靈は則
 ち戦慄す。又決して「死するにわが益なり」といふを得ず。
 われ實に福音にして若し眞實ならば予の安全なりと
 信ず、何とされば予は窮困者にわが有する限りを既に與
 べしのみあらず、又猶獲るに従ひて之を與へんと欲す、又
 もし神の手に定め期し玉ひし所の者あらんには、燒るゝ
 とも、溺らせらるゝとも、將た如何にせらるゝとも、音に予

の身を之に委して頼みざるのみならず、われは又予にし
 て幸よも能くし得べきものあらんには愛をこれ事とし、
 愛にこれ従はん(たとひわが爲さざるべからざる所を爲
 し能はざるも、猶予の能くし得べき所をささん)。これ今
 福音の眞實ありと信す。予は予の工により、予がそべての
 ものを賭してありとも予の信仰をあらはさむ。若し天命
 猶かくすべくあらばわれは幾度にもよしや千度にい
 たるとても必らずかくして予が信仰をあらはさんと欲
 す。われを視る所の者は何人も必ず予は一のキリスト
 ンとしてその分を盡さんとしつゝあるを見ん。故に「わが
 道は他人の道の如くあらず。」故に予は「諺語」たりき、「嘲笑」た
 りき、今も猶然り後も亦しかあるべし、われ甘んじて之に

處らむ。然れども一旦天變地異のわが前に當るわれは予
 則ち思ふ、若し福音にして眞實ならざる者ならば遂に之
 を如何せん。然らば則ち爾は世の最も愚あるものなり。
 何の爲めに爾は爾の財物、爾の安逸、爾の朋友、爾の名譽、爾
 の故國、爾の生命を擧げて悉く之を與へりしや。何の爲め
 に爾は天下に徘徊彷徨するや。是れ幻夢のみ、妄作
 のみ。吁嗟噫嘻、この死の恐怖より予を濟はんものは果し
 て誰ぞや。予何を爲すべきや。予何處に之を避くべきや。わ
 れ日時に之を思惟して以て之に抗すべきか、將た思はず
 慮らず、放擲して、以て之を待つべきか。哲人嘗てわれに教
 へてらふ、「且つ靜み且つ進め」と思ふに此の死の恐怖、予が
 十字架として之を視るは予に於て最も善きとならむ、而

して此十字架の手に臨むれば時は必らず予をして搦
 ならしめ、また凡そ予が善き決断を急にせしめ、殊に不
 断の祈禱を手に爲さしむるなるべし、而してこの恐怖なく
 平和の時に予は更に思慮をこれに費さず、惟静に「主の
 工」に進み勵むべし、これわれの良法あり。
 すべて航行中の日誌悲哀の告白を以て満ち單純なる信仰
 より生ずる平和の痕跡とては之を見んと欲するも得ず。然
 れども此行の師を載せて其の眞の改信の彼岸に到らせん
 とて駛する所の者に於て、米國傳道の如きは師をして險難
 の捷路を取り、安心立命の域に急がせしものあるとは後
 にぞ思ひ合はされける。

抑もウエスレー師のオクスフォードに在り、またヨアル

シアに在るや、其信仰は基督に由りて神の受くる所とあり、
 救拯の弘誓中に在りしものから、その精神その行勳未だ完
 全の域よりは遠く達せざりしなり。師は凡そ基督の福音の禁
 する所としいへば力を盡して之を擯け、その命する所とし
 いへば喜び進んで之を行ひぬ。凡そ鄙猥のもの、直接間接に
 わが心を不淨不潔に導く言語動作より遠かり、また人を讒
 笑罵嘲せず、絶えず歡を承けて多くの人の爲めに身を勞し
 難を受く。悪人を讓め、愚者を啓き、心定まらぬ者を堅ふし、善
 を爲す者を勵し、難に在る者を慰めて殆ど至らざる所なし。
 日として神の公拜に出でずといふとなく、週として主の聖
 餐に陪せずといふとなし、且つ家族祈禱を怠らず、一日のう
 ち時を定めて必らず獨自の奉事靈交を爲しぬ。凡そ此等の

事只管に神に事へ、その聖旨を爲さんが爲めにして、一の語を發し、一の行を爲し、動くにも息むにも一意神を喜ばせ、榮をこれに歸せんとしてなりき。然れども其行事は終に纒にまリスタアンたるを免かれざりしあり。

師はその主義としては神の語にあらはれて存するあるべしと信せし所の者の外何をも有せざりき、而してその語の解釋あるものは師は常にその心に起れる文字上直解の意味を以て最も善きものなりと判じたり。また堅く聖靈が人の心に働ける變化を信じ、變化を爲したる人を呼びて復び生れたるの人、新生の人といひぬ。

その祈禱に於ては應驗を受けしと多く、殊に困難に在るの時に尤も著るし。師は神と神の事とにつきては天よりの

識認を有し、また堅く耶穌基督を世の救主として信じぬ。然れども其信仰は終に纒に神の僕たるに過ぎざりしなり。

師はひたすられの力の由りて義とせられんと欲して謂ゆる信仰の信仰たる基督に由りて義とせられんとはせざりき。されば師は喜んで神の律法に服し、靈なる人たらんとして務めしも、猶罪の下に賣られし肉の奴たるを免れず。願ふ所は行さず、惡む所は却て之を行す。師は屢ば使徒パウロと同じく洪嘆にかきくると時ありき。師は實に絶えず罪と戦ひぬ、されど常に之に克つと能はざりき。師は誓に喜んで罪に事へぬ、今は喜ばざれども猶之に事ふ。一たび倒れて且つ起き、而して復た倒る。時としては罪の犯す所となりて心苦みに堪へず、時としては罪に勝ちて意願る昂る。一

たびは律法の恐怖を嘗む、されど今は福音の洗慰を味ふ。この十年のあひだ師の衷には種性と恩恵との間、此苦戦ありて罪を赦され、罪より離るゝとあく、唯之と戦ふのみ、また聖靈によりて我は神の子たるなりとの証明をそれ靈に有するとかかりき。されば自らも言へる如く基督の功績に由りておのが罪は赦さるてふ神は置ける確たる信任に乏しく、また謂ゆる信仰即ちおのれ自ら之を有せりと識認するとなくしては何人も有するとの能はざる信仰を欲さむたりしなり。

然りと雖も傳道を以て我が性命となし慎獨克己を以て禮に復り徳を進まんとせしりの塾實あして熱心なりしとは當時に在りて何人も師の右に出づる者あらざりき。師が

米國の傳道は失措の業たりしは固より疑ふべき所には非らざれども二年間の拮据執掌さしむ功の無かりしとはいかでいふとを得ん。後ちホイットフィールド米國は飛錫し、熱らウエスレイ師の爲せし蹟を見て、師が米國に爲したる善きとは言語の能く盡す所にあらず、師の名は噴々として人民のなかにいと貴し、師は實に人も悪魔も決して揺撼し能はざる基礎をすゑぬ。吁、予は彼が基督に従ひし如く彼に従はんと嘆賞したりしといふ。

師は一千七百三十八年の二月一日再び足を故山英吉利の地に踏み入れぬ。母を省し、故舊を訪ひつゝ傳道も遠かかりし折しもペエナル、パウルなるもの新に德國より來り、將にカロリナに赴かんとしてしばし英國に駐りぬ。師はハ

ウレルのモラヒアンなるを知り、また英國にはかれ一人の知人なきを以て師はパウレルの爲めに周旋至らざる所なし。パウレルの師より少きと八年しかも信仰道德双ながら遠く造り、正々神が用ゐる玉ひて、ウエスレイ師が改信の導火たらしめし所の器ありき。師の始めてパウレルに逢ひしハ二月の七日にして爾後屢ば相見て其説を叩く。パウレルに告ぐるに、謂ゆる基督よ於ける眞の信仰なるものは罪に克つとと我が罪赦るされたりとの感情より生ずる不斷の平和と此二の者決して相分離せざる所の者あるを以てす。師これを聽きて大に驚き、以て新福音とあす、何となれば若し謂ゆる信仰あるものは果して此の如きものありとせば師の如く此分離すべからざる果を有せざるものは基督

に於ける眞の信仰なき者とせざるべからざればなり。故に師の之を識認するに能はず、力を盡くしてその説を駁し、この二の効果なく、殊に不斷の平和なくとも信仰なるものは存立すべきを証せんとして甚だ勉めたりしが、パウレルの徐に聖書を開きて所々引照し、又人の経験を擧げて師に説く。師漸く辞窮す、然れども猶容易に服すると能はず。明日パウレルの三人の友を拉へて來る、彼等皆いふ所パウレルと異るとかく、且つ口を一にしていふ、此信仰の神よりの自由ある寶物なり、神は必ず熱心に絶えず之を所り求むる所の者に與へ玉ふなりと。

師のパウレルと會合して議論を上下せると漸く度重なるに従ひて次第にその説に服するに至りぬ。四月二十二日

師はまたパウレルと語る、パウレルが基督に於けるこの救
拯の信仰の即時に與へらるゝ者なると、また倏忽の間に人
は罪と煩悶との域より一轉して聖靈に於ける公義と喜悅
とに遷るを得る者なるをいふに及びて師の驚き、足を頓
して肯て従はず。パウレル乃ち聖書を援りて引照し、また其
經驗によりて之を論ず。師は忙はしく聖書を開きて之を究
ひるに實にパウレルの言吾を欺かざるものあるを見る。師
一たびはいたく打驚さしが、猶全く解せざる所あり、パウレ
ルに語りていはく、「神は基督教の初代はかく行ひ玉ひし
も今は則ち然らず」と。翌日パウレルはまた其友數人を伴ひ
て師を訪ひ、彼等を活ける証明として師に向ひて其經驗を
語らしむ。彼等いふ、神は彼等に基督に於ける此の如き信仰

を與へ、彼等をして即時に黒闇より出で、光明に歩み、罪と
懼とより聖と福とに入らしめ玉へり。師は此日の日誌に
書していはく、「予は是れ於てわが争辯を停めぬ。予は唯主よ
わが信あきを助け玉へ」と叫ぶ。あるのみ。われは今や全く此
教理を識認せり、而して神の恵みによりて終りに至るまで
此信仰を追求せん。と心を決せり」と。

パウレルの英國に滞留せる間は機さへあればウエズ
ン師に面して、いかにもして師を啓んものと務めたり。然
ども師は未だ豁然として開悟するに至らず、一日パウレル
の足下に跪きて、これの不肖を嘆す。實にや道を見ると赤
子に若かず。パウレルは師を慰めていはく、「この兄弟よ、わが
兄弟よ、御身の哲學の棄て去らざるべからず」と。師は又思へ

らく、信仰なくしていかで教を説んやと、爾後復た道を傳へ
 教を説くとあからんと欲す、パウレル之を禁めて、「左を宣ひ
 そ。御身信仰を有ち玉ふに至るまで信仰を説きたまへ、然る
 のちは信仰を有ち玉ふが故に信仰を説くに至り玉ふべし」
 といふ。既にしてパウレルの説ウエスレー師が朋友間に傳
 はり、師の弟チャアレス及びカンボルド、ストウンハウスの
 三人唯信仰にのみよりて救はるとの教理を受納れ、ホイッ
 トフ井ルド、ハツチンの二人は既に心お之を経験するに至
 れり。チャアレスの如きハ初め此説を師より聽し時には怒
 て之を擯けしにも拘はらず、適其病は彼をして五月廿一
 日といふ日嚮に受けし教理を心に實にし愛と平和とを以
 て満たさるゝに至れり。然れども師は猶煩悶の人たるを死

れず。是時に當りパウレルは既にカロリキに向け纜を解き
 ておらず。師腦は岑々として重く、心緒亂れて麻の如く、夜は
 輾轉していもねられず。惟へらく裏に一の善あぐりの工、そ
 の義、その祈一として憐焉たらざるはなし。師の口の結ばら
 りぬ。我身に報はるべきものは神の怒の外は何物も存せざ
 るを識る、然れども猶聲あり、「信せよ、さらば救はるべし。」信
 ずるもれば死より生に遷れり」と囁くを聽く。諸友の信仰に
 視、チャアレスの達悟に耻ぢ、煩悶憂情に日を送ること茲に
 三日に及ぶ。

明きは則ち一千七百三十八年五月二十四日東窓の法が
 らく、なると共に師の床を離れ、午前五時希臘文の聖書を
 開き、適其神その榮と徳とによりて至大ある貴き約束を我

併に予へたまへり此は爾曹をして此約束に由りて世に在
 る所の慾の敗壞を脱かれ神の性質を有しめん爲めなり」の
 語を見る。將に家を出でんとするに際して、又卷を展けば「爾
 は神の國に遠からず」の句あらはれぬ。午後は囑に應じて聖
 保羅教會に赴く、衆の謳ふ處の讚美歌甚だ師の心を慰さめ
 たり。夜に入り、心頗る進まされどもオルマスゲエトスト
 リイのメソヂスト社小集會に往きぬ。時に一人あり、パウ
 ロの羅馬人に送れる書にマルチン、ルウテルが附せし序文
 を讀めり。文中ルウテルは信仰とは如何なるもの、また唯信
 仰のみ獨り能く人をして義たらしむるを反覆して教へ、
 此信仰ありて始めて心の喜悅に満ち、高く昂り感興し、優あ
 る愛情を以て神に近き向ふに至ると、此信仰に由りて聖靈

を受け、始めて人は新に生れ、靈につける者となり裏に存す
 る活力によりて勵され、律法を完うするに至るとをいふ。師
 は耳をそばだて、之を聽き、九時に十五分前といふ時忽ち
 心に異常なる變化を驗せり。師自ら記していはく、此時わが
 心の異しきまでに燃えぬ。われは救はれんが爲め、基督に
 唯基督一人に信任を置きぬ。而して基督は予が罪、予の如き
 者さへへの罪を去り、罪と死との律法よりわれを救ひしこと
 の保証予が心に來れり。われ是に於てわが今始めて心に感
 興したりし所を居合せたる人々に告げて、ルウテルの言吾
 を欺かざるを證明せりき。師の欣喜は如何ありけん。積年
 の偏信この日來の苦悶一時に晴れて、救拯の大光は外に耀
 き、福音の至社に内に滯ひ、殆ど手の舞ひ足の踏む所を知ら

ざりしあるべし。師の弟チャアレスの日誌しるして、此夜十時頃師の友等は師を扶けてチャアレスの許に送り届け、亦同じく欣喜に溢れて讚美歌を歌ひ、れの祈禱を以て散せしといふ左もありあん。師は時に年三十五、こゝに始めて豁然として貫通し、救拯の眞味を味へりしなり。蓋しウエスレイ師は幼よりして早く基督を信じたりき、然れども今信する如くには信せざりき。師は非常ある敬虔を以て世に處せりき、然れども今は未だ嘗て有せざりし所の己に克ち罪を服ふる力を有するに至れり。師は嘗て宗教を實踐せりき、然れども今はその至福を味へり。師は是迄は神の僕にして、常に全力を振ひて悪魔と戦ひ、且つ敗れ且つ勝ちたりき、然れども今は神の子として、常に戦勝者たり、幸

福にして安全あり。師の靈には日光始めて射て、師はこゝに面を擧ぐるとを得、最も劇しき厭世家たりしより(たどひ一時ありしにせよ)漸々雍々たる聖徒となるに至れり。ウエスレイ師はこゝに始めて心よ光明を認め、平和を獲たり、然れども師が聖靈に於けるの喜悅は時として之を失ふとあぐんばあらず。今其日誌を按ずるに師は改信の夜家に歸りたるのち各種の誘惑み心を苦めらる。師一喝す、魔誘乃ち退く。少らくして復至り、頻に迫る。師是に於て目を擧げ、神を望み、援助を請ひて纒に免るゝを得たり。翌二十五日惑者また來りて心耳にさゝやき、恐怖を投ず、いはく、「卿もし信すとあらば何ぞかく小變化に止るのみにして猶一層の著るきものなきや。」師心に答へけらく、「問ふ所の如きはわれ

知らず、予は唯われの今神とやわらげるを知るのみ。且つわれ今日罪を犯さず、我主耶蘇われをして明日の事を思ひ煩ふとを禁じたまふ。「惑者又いふ、然れども心に恐怖のある以上は神を信じをさざるの証にあらずや。」師頗る迷ふ、乃ち耶蘇のれのれの爲めに對へたまはんとを望みて聖書を開き、パウロの語外には争ひ内には懼れありきを見る。師是に於て之を推度し、よしんばわが内は恐怖あらばわれは進まざるべからず、進んで之を蹂躙せざるべからず」と心を決しぬ。廿六日師の靈は平和なりしかど誘惑の劇しきに頭重く氣塞げり。廿七日師は喜悅乏しき所以の一因は祈禱の時之乏しきに在るを信じて、朝教會詣るまでは事務を執らず、只管神に祈り心情を吐露するに費すべきとを定めしか

ば、此日師の靈頗る廣く、救主なる神に於ける信任と喜悅より生じ來れる勢力を以て各種の誘惑と戦ひて餘りありき。廿八日平和なると常の如し、然れどもよろこびあじ。廿九日師はウォルフなるものと共にダンマに赴けり、ウォルフはペエナル、パウレルが英國よて道を傳へし初めの果あり。師はウォルフが信仰の堅確なるを見て大に之を賞嘆す、遂にいはいく、「たとひ彼の信仰ハ強く、我は弱くとも猶神はわが如きものになへ信仰の幾分を與へたまへり、われ之をその果によりて知る。何となればわれは不斷の平和を有して、一の安からぬ想念を有せず、また我は罪より自由あるものとなりて一の聖からぬ思望を挾まざればなり」と。三十一日師は祈禱を怠りしのみならず、會堂意に逆ふとありて思はず

も人に對して鋭き言葉を發したりしたため大に神の靈を悲
 しませ神は直ちにその顔を匿せり。師是に於て大に懊惱し、
 翌朝又至るまで快々として樂まず。然れども此間師は絶え
 ず神の恩宥を祈り聖書を読みつゝ種々なる誘惑を退け救
 主なる神を信任して喜樂するの力一層を増し、大に洗慰を
 得たり。

初めウエスレイ師のソオルシアに苦めるや、若し英國に
 歸るを得ば、一たび德國に遊び、モラビアン派の本據たる
 ヘルンハットを訪はんと思ひたりしが今またモラビアン
 ハウルルによりて始めて確信と平和を得たれば益すべ
 ルンハット戀しく、遂に六月七日意を決して德國に往き、信
 仰の人と交り、日來の苦勞を慰めんと欲し、翌八日サリスベ

リンに赴きて暇を母スザンナに請ひ、オクスフォルドに至
 れば往年のメッヂストの朋友は皆四散して、一人の留まる
 ものなし。十一日日曜日この地にて「基督に於ける信仰」と題
 し、「なんぢら恩によりて救を得これ信仰に由りてなり」を引
 きて有名なる説教を爲しぬ。論ずる所は謂ゆる我儕が救拯
 を得べき信仰なるものは異教者が唯神の存在と神は勉め
 て之を求むる者に報い玉ふものなりと信するが如き信仰
 にあらず、また悪魔が異教者の信仰に一步進みて耶蘇は神
 の子あして基督は世の教主ありと信するが如き信仰にも
 あらず、また唯使徒等が基督猶世にあるの際一切を棄てよ
 之に従ひ、奇蹟を行ふの權を授けられ、説教をすべきため派
 遣せられし時の如き信仰にもあらずして唯一つ基督の血

に全く信頼する——彼の生と死と復活との功德に打任
 する——は信仰なり。彼の我儕の爲に與へられ、我儕のう
 ちに住み、以て我儕が代贖及び生命として彼が肩に安息す
 る所の信仰あり。畢竟する所は彼を以て我儕が智慧とし、正
 義とし、神聖に爲すものとし贖罪とするに在り、一言を以て
 之を約すれば我儕が救拯として彼に近接し、彼は密着する
 に在りとは是れなり。これ實に師が改信後十八日の説教にし
 て、爾後師が執りし所の教理の要樞なり。越えて十三日師
 はインガムを伴ひて便船し、德國に遊びぬ。

ロツテルダムにては醫士コツケルの厚待を受け、ゴンダ
 トにては旅舎その宿を謝し、アムステルダムに往きては牧
 師アツクナアタル醫士ハルクハウセンに歓迎せられて四

日こゝに留り、コログ子の安息日に途に羅馬教徒の鹵簿に
 逢ひ、帽を脱せざりしために師の友は從者の一喝を喫し、ラ
 イン河を上ると四晝夜、流れ急なれば馬を以て船を牽きゆ
 く。兩岸の山節として險しく、葡萄樹その巔にはひまつはり
 て頗る幽邃、人意爽あり。教會堂古城寨迎へては送り、送りて
 は迎へて應接いとまもあらず。フランクホルトに上陸して、
 ペエナル、バウレルが父の家おやどり、七月四日こゝより三
 十五英里隔たれるマリエンポルンに往き、始めてゾンセン
 ドルフ侯に謁す。侯は二年前此地より三英里程なるロンチ
 ポルグといへる古城に居を移し、貧家の子弟の爲めに數個
 の學校を設けて衣食を給せり。又侯は宣教師學校を設置す、
 生徒の數は四十人皆エナより來りしもの、後ち多くは歐洲

諸國及び異邦人の宣教師とされり。マリンボルシンの一家は所々より集り來りし九十人の一群、一家族たり、家は侯より貸與する所なり。六日師は侯に伴れてソルムス侯に謁し、其翌午餐の饗を受く質素和樂而ながら英人の夢想し得ざる所なり。師は二週の間此地に滞留し、羅甸語及び英語を以て衆と語り、侯の説教を聴き、各種の集會に列し、信仰の力の活ける証明を目撃し、心に溢るゝばかりそゝがれし神の愛により内外の罪より救はれ、常に聖靈を心に宿して、疑惑も恐怖もなき篤信の人々と交り、觀感して興起する所少しとせず。當時師書を兄サミュエルに貽り、心情を記して曰く、「神は予の日頃の念願を成就なさしめたまひぬ、われ今は人々の會話此世のものとはよも思へぬ、教會のうちに日を送れり。」

その人々の心は全く基督に在るの心とればしく、基督が歩みし如くこの人々もわゆる。此人々の一の主一の信仰を有する如くまた一の靈——柔和と愛との靈をれの——願ち有ちて、一樣に、また絶えず此靈にその會話を勵され促されをれり。われインガム氏と一週間後には三百五十英里さきあるヘルンハットに向け出發せんと欲す、ねがはくは神が此等の得むたき好機會を我儕に神聖にあし玉はるやう祈禱せよ」と。

八月一日師はインガムと共にヘルンハット村に到着せり。戸數は一百ばかり、小高き所に建てらる。建築の大なるものは孤兒院にして、教會は院の上層に在りて六七百人を容るべし。村の東端にモンペンドルフ侯の居宅あり、家小かれ

と閑雅なり。うしろに大なる庭園あり、公共の用に供すといふ。こゝに師はシオルシアにての舊友なりしヘルムスドルフに邂逅す、ヘルムスドルフ師の爲め周旋至らざる所なく、師はこゝにも亦二週間滞在せり。師が此地に着るの翌日既婚婦の愛餐に連れり、毎日午前十一時には聖書會あり、聖書の幾章節を其原文にて研究す。日曜日には夕の禮拜をはれば處女因一群は其の慣例により樂器を執り頌歌を謳ひて村内を巡回し、而してのち村より少し離れて崛起せる小丘に登り、環形を爲じて跪き、祈禱を捧げてれの、喜びに満ちてその家に歸る、師之を觀る。師は又外國人會(外國のたゆめり會)に出席して平生義とせら

るゝとにつきて種々の疑感のありしをこゝに始めて解くを得、またクリスチャン、ダビドの説教を聴くと前後四回にして、其言大に師が當時宗教上の經驗に益を與へぬ。且つダビド自ら述べしその經歷し來りし所、ミカエル、リンチル、ダビド、ニツツマン、アウガスチン、チツセル、ダビド、ヤナイダ、ル、クリストフ、デムウト、アルビド、グラデン、等の如き最も徳行あり經驗ある人々の師に告げし神が此等の人の裏に作したまひし大なる工を聽きて感悟淺少あらず益すその信を堅ふし、教師長老等に就きて其教會規約を學びて、發明する所多し。師記していはく、予は願ふ予はよるこんでわが一を生を此地に送らんとを。嗚呼此の如き基督教の水の海上を掩ふが如く地を掩ふは抑もいづれの時なりや」と。

ヲヨシ、ウエスレー師は一千七百三十八年八月十二日幾
 多の喜悅と希望とよ満ち、救拯の新嘉音を懐ひて、インガム
 と共にモラピアンの本地へルンハットを辭し、九月十六日
 再び英國ロンドンに歸れり。リバイバル荐りに興り、宗教の
 第二改革成る。

(をばり)

明治廿七年十二月八日印刷
 明治廿七年十二月十一日發行

著者

櫻井成明

東京市下谷區谷中三崎町三十五番地土族

發行者

清水俊藏

東京市麹町區紀尾井町三番地寄留

印刷者

小方仙之助

東京市麹町區有樂町三丁目二番地

發行所

メソヂスト出版舎

東京市京橋區銀座三丁目八番地

印刷所

青山學院實業部

東京府南豊島郡澁谷村一番地

5
6

166
129

020263-000-0

特15-966

うゑすれい師改信始末

桜井 成明/著

M27

ABI-0068

